



【聖書の中の「母」】

聖書には大勢の母が登場する。皆罪人なのであるが、神に向かった心砕かれた母もいれば、子供に悪影響を及ぼした母もいた。

- **エバ** すべて生ける者の母となった。息子たちの間で起きた殺人を通して自らの罪の結果と悲しみを知った母。同時にサタンを滅ぼす「子孫」の約束、神に従ったセツを通して希望を見いだした母。
- **サラ** 最も高齢（90歳）で出産し、母となった人。途中何度も不信仰を表しつつも、最終的には神の約束を夫と共に信じ続けた信仰の女性。
- **リベカ** 夫イサクとエサウ、ヤコブをそれぞれ偏愛したという失敗をするが、神の祝福と約束を第一にし、ヤコブを通して救い主の祖先になる。
- **レア** 美貌に恵まれず、夫に愛されない悲哀の中、静かだが、力強い信仰を持つようになり、息子ユダを通して、救い主の祖先となる。
- **ハンナ** 子供が与えられなかった中で、涙の祈りをささげ、偉大な預言者サムエルの母となった。新約聖書のアンナはハンナのギリシャ語読み。
- **ナオミとルツ** 夫、二人の息子に先立たれた母ナオミは義理の娘モアブ人ルツを神に与えられる。ルツは救い主の祖先の一人となる。
- **バテシェバ** 姦淫を犯した者として終世知られることになるが、神の赦しとやり直しの人生を頂き、救い主の系譜に加えられた母。
- **マリア** 救い主の母。十字架での息子の苦しみと死を目撃するが、復活にも出会う。初代教会の中心にいた。初代教会の指導的な働きをしたヤコブ、ユダ書を著したユダは夫ヨセフとの間に生まれたイエスの弟達。
- **ミセス・ゼバダイ** 使徒ヨハネとヤコブの母。イエスに「息子たち右大臣、左大臣にしてください」と頼んだ教育ママの走り。
- **ヘロデヤ** 自分の不正な結婚を正当化するためなら娘のサロメの踊りをきっかけにバプテスマのヨハネの首を要求する悪い母親。

【今週の英語】 The Influence of the Bible



"The Bible is no mere book, but a Living Creature, with a power that conquers all that oppose it." Napoleon

聖書は単なる書物ではなく、全て反対しようとするものを征服する力を持った生きものである。

ナポレオン

"Let mental culture go on advancing, let the natural sciences progress in even greater extent and depth, and the human mind widen itself as much as it desires: beyond the elevation and moral culture of Christianity, as it shines forth in the Gospels, it will not go." Goethe

精神的な文化は進み続けなければならない。自然科学もさらに遠く、深く進ませ、理性もその欲する所まで広がっていったらいい。しかしそれらがどれほど進もうとも、福音書を通して明らかにされるキリスト教の高邁さと道徳的文化水準を凌駕するものはない。ゲーテ



【今週の暗唱聖句】 エペソ6：2、3

「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、「そうしたら、あなたは幸せになり、地上で長生きする。」という約束です。



●**第一の戒め**：あれ？第一戒は「わたしの他に他の神々〜」ではなかったか？と思った人もいるだろう。パウロはここで十戒の中の第5～第10の人間関係に関する戒めの中での第一戒めと表現したのである。第一であるから、それだけ重要性が高い。父母は、定義的に言ってあなたに「命」を与え、無条件で愛し、養い育ててくれる存在である。その親に対して、子供は従順（エペソ6：1）と尊敬（6：2）を持って応答することで人生を生きて行くための確かな土台を築けるのである。信頼、従順、責任感等、人間社会の土台となる価値は実に親子関係の中で形成されて行くからである。親子関係の崩壊は社会の崩壊の先駆けであり、逆に社会の変革は、まず家庭から始まらなければならない。

●**約束が伴ったもの**：十戒の後半、第5～10で約束が付加されているのは第5戒だけである。「幸せ」は実に、父母を尊敬することの中に、見いだすことができる、これは重力の法則と同じくらい確かな法則なのである。法則を破ればケガをするのと同様、親を尊敬しないなら、あなたは確実に不幸せになる。寿命さえも短くなるかも知れない。

●**そんなことを言っただって、親など尊敬できないではないか！**：確かに！罪深い世界に私たちは生まれ、私たちが最初に受けるダメージ

は実に親からである。親もそのまた親も、アダム・エバにさかのぼるまで罪人であるからだ。親の傷つく言葉、暴力、無関心、無能力、過干渉、偏愛、不在、不道徳、無責任等、親の罪はあらゆる領域で子供に影響を及ぼす。しかし、そんな親だからと言って「尊敬しなくてよい」という訳にも行かないところが難しいのである。なぜなら、親を敬わないことを選ぶことは、尊敬、信頼、愛という、人生の土台に据えるべき最も重要な価値を拒絶するばかりか、結果的に裁く思い、不信感、自力本願、など不幸せな人生をもたらす否定的な価値を自分の土台に据えてしまうことになるからである。

●**では、どうすればいいのか？**：先ず主イエスを信じ、洗礼を受け、自ら罪赦された存在である、ということをして人生の土台に据えよう。あなたは確かに被害者なのだから、当然報復する権利があるのだが、自分が神に愛され、罪赦されたことが分かるなら、親を裁き、親に報復する権利を聖霊の力によって放棄することができるようになるのである。これこそ福音である。既に亡くなった親に対しても赦しを宣言し、親の祝福を祈る。自分を産んでくれた、というその一点でさえ、尊敬と感謝のポイントになるはずだ。そしてさらに親を敬えるよう祈り求めて行こう。あなたの幸せはそこにある。■